

徳川吉宗再興の江戸幕府直轄牧

嶺岡牧



1960年頃の嶺岡西牧馬捕り場

千葉県酪農のさと／嶺岡牧研究所



嶺岡柱木牧からの外房の海を望む

はじめに

造礁珊瑚の北限地と温かな千葉県安房地域に、全国に4箇所しかない江戸幕府直轄牧の一つである嶺岡牧がある。ここは、海が望める広々とした草地に、馬が群れている牧場であった。嶺岡牧は、八代將軍徳川吉宗が、「白牛酪」をつくるため、嶺岡牧で酪農を始めた日本酪農発祥の地で、今日の牛乳・乳製品に彩られた食卓の原点となった記念すべき地である。

しかし、1911（明治44）年に牧場が閉じられてからすでに100年を経た今日、嶺岡牧は住民の脳裏から忘れられ、その大きさ、形など、基礎的なことさえ分からなくなってしまった。

今、嶺岡牧は、鬱蒼とした山中にひっそりと埋もれているが、房総の特有の環境と住民の活動により築かれた地域個性



千葉県内の江戸幕府直轄牧（小久貫 2006）

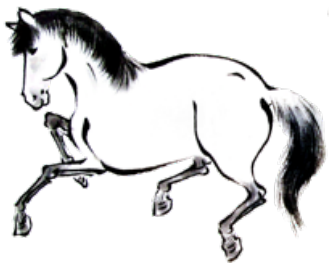
を端的に示し、しかも国民生活を大きく進歩させた国家的遺産である嶺岡牧は、個性豊かな地域再生の巨大資源と考えられる。現在、潜在資源にとどまっている嶺岡牧を持続的資源とするため、鴨川市、千葉県酪農のさとにより相次いで基礎調査が行われた。嶺岡牧の外周は約70kmと言われており、一回りするだけで3日かかる広大な遺跡である。しかも、竹藪に行く手を阻まれ、急斜面に残る野馬土手を崖下に滑り落ちる危険の中で追うなど現地調査は困難を極めたが、漸く嶺岡牧の実態が捉えられてきた。そこで、初めての科学的調査で捉えた嶺岡牧の姿をここに整理することとした。これにより、千葉が誇る歴史遺産である嶺岡牧を見直し、資源化に向けて更なる活動への一里塚となることを望む次第である。

目次

はじめに

1. 房総の山につくられた牧	1
2. 嶺岡牧の範囲を捉える	2
3. 野馬土手で牛馬の動きをコントロール	4
4. 石切をして築いた野馬土手	5
5. 牧を通る古道	6
6. 鞍部に輝く馬の水飲み場	7
7. 四角い鍋底形をした馬の繁殖地	8
8. 年に一度の祭り 馬捕り	8
9. 牛馬を管理した拠点	11
10. 牛馬に感謝し暮らしの安寧を祈って	12
11. 地域酪農会社と黎明期の乳製品製造業	13

おわりに



夕陽に輝く嶺岡山 海に向かってのびた嶺岡山のほぼ全域が牧であった



日本の原風景が続く嶺岡山とその周辺地域

1. 房総の山につくられた牧

東京方面から鴨川市に入ると、田圃越しに穏やかな山容の嶺岡山が目飛び込んでくる。この嶺岡山は千葉県の背骨に当たり、千葉県の最高峰の愛宕山（408 m）が中央部西よりそびえている。嶺岡牧は、この嶺岡山のほぼ全域と、それに隣接した柱木山に形成された牧である。全国に4箇所ある江戸幕府直轄牧の内、山地につくられた牧は嶺岡牧だけである。とりわけ柱木牧は、老年期に入ってきている嶺岡山の東部と違って壮年期の山地で、険しい斜面を基本としている。

前原海岸から至近な安房鴨川駅から、長狭平野を縦断する長狭街道を西走し、東京湾岸との分水嶺近くに至る30分ほどの間、車窓から木々に包まれた嶺岡山、その麓に散在する家、前面に広がる田圃という日本の原風景が続いている。しかし、嶺岡山や柱木山が木で覆われたのは戦後の拡大造林以後で、嶺岡牧が平安時代以降ほぼ一貫して牧であったことを考えると、斜面林の上に草原が広がる景観が、ここの文化的景観といえることができる。

また、嶺岡牧は、海が望める牧であることも小金牧、佐倉牧と異なる。とりわけ柱木牧は、黒潮が洗う外房と、東京湾の入口を一望することができる。



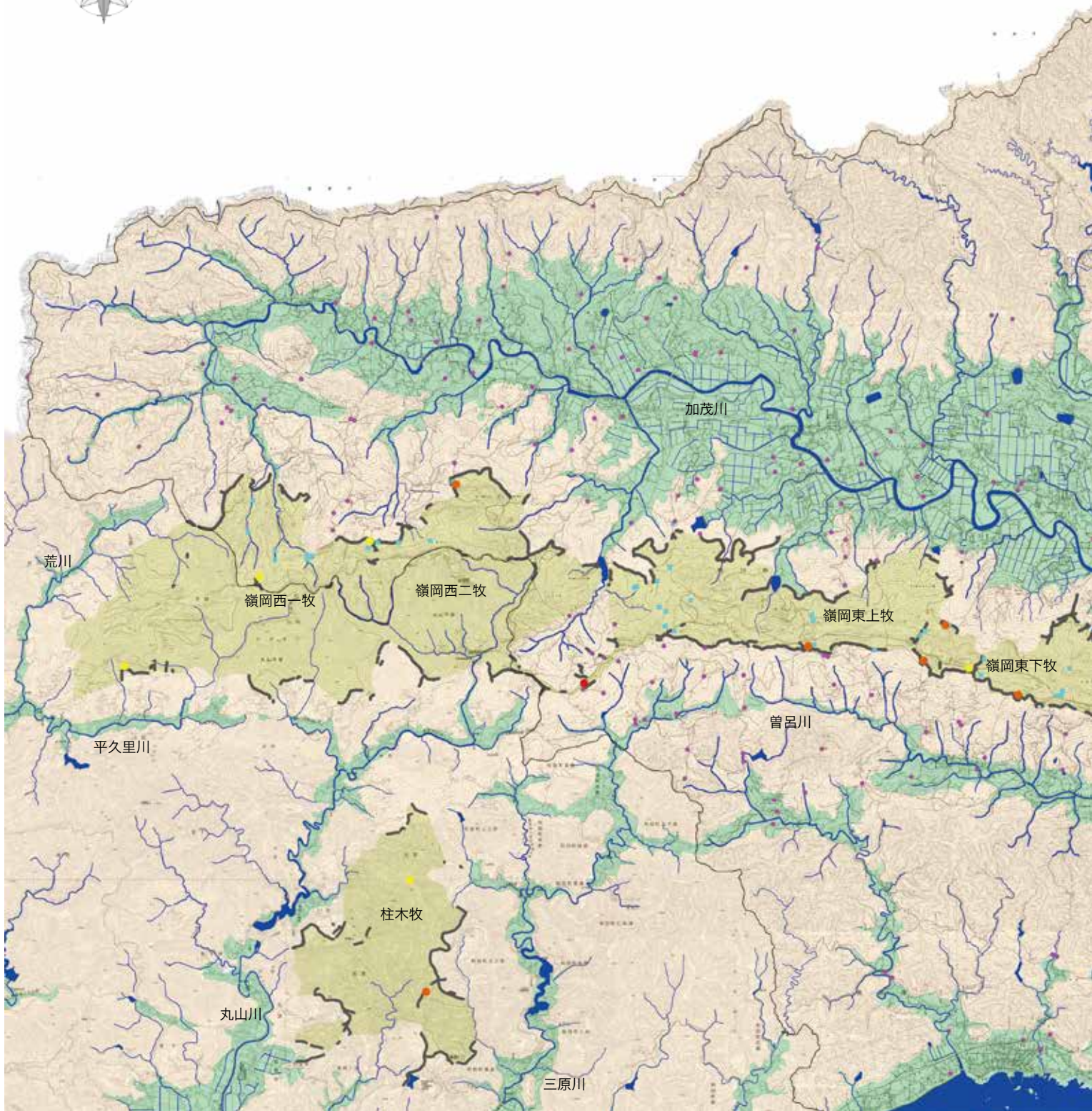
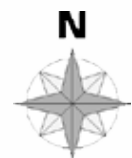
1960年頃に撮られた嶺岡東牧の景観 谷斜面の林以外は草原だった



柱木牧は江戸幕府直轄牧で唯一平野がない山地に造られた牧である



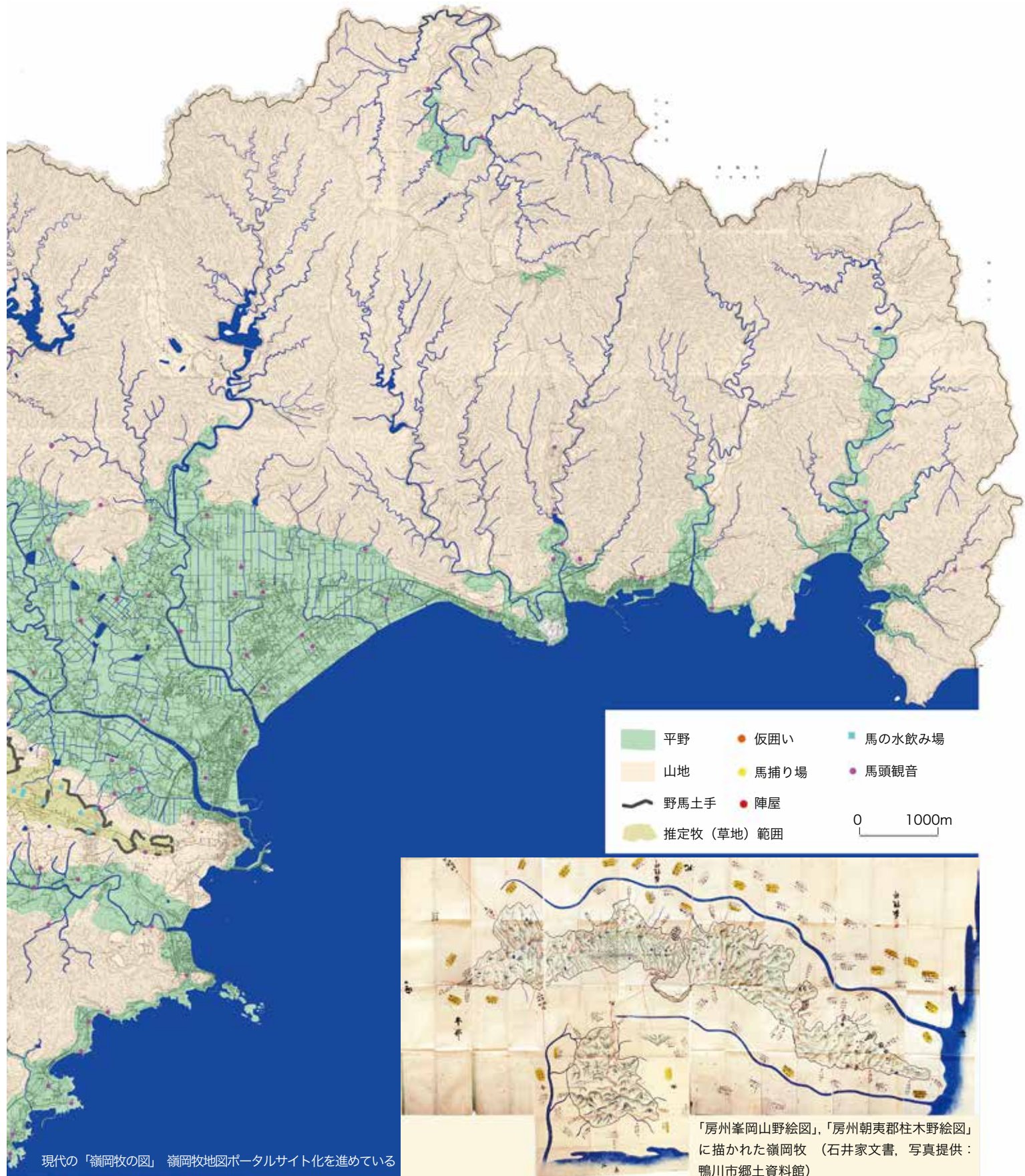
柱木牧に立つと一度に外房の海と東京湾が目飛び込んでくる 鏡ヶ浦に沈む夕陽 大島、利島も見えている



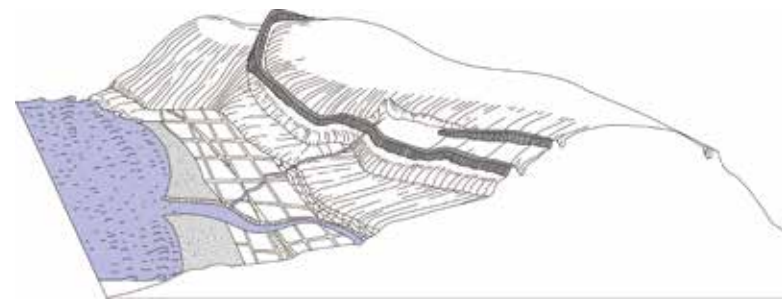
2. 嶺岡牧の範囲を捉える

嶺岡牧の範囲は、1725（享保10）年に描かれた「房州峯岡山野絵図」、「房州朝夷郡柱木野絵図」と、明治時代の迅速測図からの類推に過ぎなかった。そこで、草地を画す野馬土手の位置を捉える調査を行った。その結果、青木(2005)が1.9 kmしか残っていないと記している野馬土手を、現時点で約38 km確認できた。また、野馬土手の位置は全て座標で捉えており、その位置・形状が明確になった。

野馬土手の分布から、1) 嶺岡山は半ばに地形に沿って野馬土手が廻るが柱木牧は尾根線に野馬土手が連なる、2) 牧内を仕切る土手が築かれている、3) 嶺岡山の牧は絵図と似ているが柱木牧は絵図と異なる、4) 野馬土手の分布は「嶺岡牧」、「柱木牧」の字界と一致すること、が確認された。それにより、嶺岡牧と柱木牧では、牧の中心が尾根平野か谷かの相違があること、村で牧を細分管理していることが浮かび上がってきた。同時に、野馬土手の範囲が牧範囲か疑問となった。



現代の「嶺岡牧の図」 嶺岡牧地図ポータルサイト化を進めている



嶺岡東牧、嶺岡西牧北側は尾根平野を囲う形で野馬土手を築いている



柱木牧は尾根線付近に谷を囲う形で野馬土手を築いている



柱木山の斜面に造られた嶺岡型の野馬土手



削り残した尾根と土盛りで二重土手をなす柱木 1 型



尾根頂部に盛り土した土手の両縁に平場がある柱木 2 型



尾根に盛り土した土手の片縁だけ平場がある柱木 3 型



削り残した土手状の尾根が高い柱木 4 型



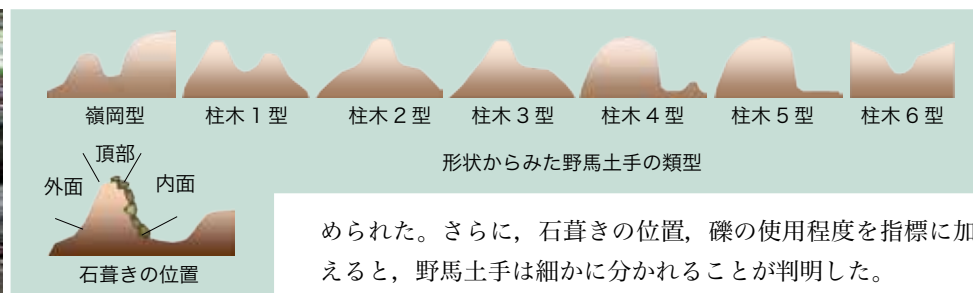
痩せ尾根をカットして土手を造った柱木 5 型の野馬土手



野馬堀だけの柱木 6 型は谷に造られる例が多い



嶺岡牧特有な石葺きの野馬土手



3. 野馬土手で牛馬の動きをコントロール

嶺岡牧は江戸幕府直轄牧の中で唯一、野馬土手に礫が用いられている。嶺岡牧の野馬土手は、a. 土盛り、b. 砂利盛り、c. 石葺き、d. 石垣、e. 石を芯にした土盛りがみられ、嶺岡東牧南側と嶺岡西二牧北側は石葺き、嶺岡東下牧北側、嶺岡西牧南側及び柱木牧は土盛り、嶺岡東上牧北側は石葺きと土盛りが混在、嶺岡西一牧北側は砂利盛りが中心と、地域的相違が認

められた。さらに、石葺きの位置、礫の使用程度を指標に加えると、野馬土手は細かに分かれることが判明した。

嶺岡山の野馬土手は、尾根平野を牧とし、斜面に野馬堀を掘り、その外に土手を築いて牧を囲っているが、柱木牧は尾根線近くに野馬土手を造っているため、嶺岡型の野馬土手に加え、尾根に堀を掘り土手を盛った柱木 1 型、堀が無く土手を盛っただけの柱木 2 型・3 型、尾根を削って土手を造り出した柱木 4 型・5 型、野馬堀だけの柱木 6 型がある。なお、柱木牧の野馬堀は、牛馬の移動路の役目も兼ねていたと考えられる。



石垣の野馬土手に矢穴が穿たれた石が積まれている



矢穴が並んだ石を積んだ野馬土手



鑿切り仕上げをした石が積まれた野馬土手



割付線が彫られた巨礫

4. 石切をして築いた野馬土手

これまで、石垣や石葺きの野馬土手に用いた石がどのように調達されたものかは、まったく気にされていなかった。しかし、野馬土手をみていくと、割られた石が多く使われていることから、石切が行われていることが考えられた。延々と続く石葺き・石垣の野馬土手に立ち止まって、積まれている石に視線を向け

ると矢穴石を発見でき、石切をして石を入手していたことが分かった。そこで、野馬土手近くの巨礫に注意したところ矢穴痕を持つ礫が見つかり、牧内に石切丁場が点在することが分かった。また、石を切る割付線が彫られた巨礫や刻印石、木っ端石が広がる石加工工場、石を引き出す石引丁場と、石材生産から消費までの一連の遺構がセットで残されていることが判明した。



矢穴が並んだ石切の跡



矢穴が残る巨礫と石切しても使われず残された矢穴のある角柱に切られた石



木っ端石が転がる石加工の跡



四角に点を彫った刻印石（的石）



石切丁場から真っ直ぐにのびる石引丁場跡



L字形になる野馬土手の角に道が通っている 土手が一際高く造られている



木戸跡の土手の外側を段切りして石仏を祀っている



牧から外に延びる石畳の古道



古道脇の馬頭観音



山道として今も使われている古道



牧内に残る道標



牧内にある嶺岡浅間に行く参道入口にたてられた常夜灯



常夜灯は野馬土手上にたてられている



嶺岡浅間の石祀



明治政府の管轄下にあった1872(明治5)年に描かれた絵図に野馬土手のラインと道及び木戸跡が記されている(貝渚区有文書)



「房州峯岡山野絵図」に最も大きな馬の水飲み場として描かれている津倉池 B型(竹が繁茂している所が土手) 現在も農業用水に使用している



A型 ボーリング棒を刺したところ池底まで1mほどあった



C-D型 礫と粘土を積んで水を堰き止めるとともに回りに礫を置いている



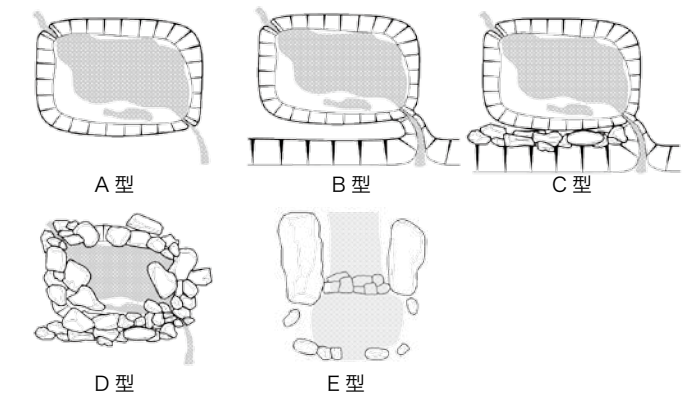
D型 刀洗井戸と呼ばれる 縁に礫を回している



E型 嶺岡西牧は「馬の水飲み場」の言い伝えが多い 今も水道に利用

6. 鞍部に輝く馬の水飲み場

江戸幕府が嶺岡牧の再興理由の一つに馬の水飲み場が確保しやすいことをあげているが、嶺岡山は高地性湿地で、山の鞍部に馬の水飲み場が多数造られている。馬の水飲み場は、A型：掘り込み、B型：土手で水を堰き止め、C型：水を礫で堰き止め、D型：掘り込んだ縁辺に礫を並べる、E型：小川に石堤を設ける、に分類される。絵図には56箇所の馬の水飲み場が描かれているが、調査で44箇所確認した。嶺岡牧は西に行くに従いA型からD型へ、そしてE型に移っている。なお、絵図に印された嶺岡西牧南側、柱木牧の馬の水飲み場は、河川改修が進んでおり確認できなかった。



馬の水飲み場の類型(人為痕跡が見いだせないものは対象にしていない)



仲町の仮囲い 山をカットし崖と平坦地を造り出し平坦地の端を土手で塞ぐ



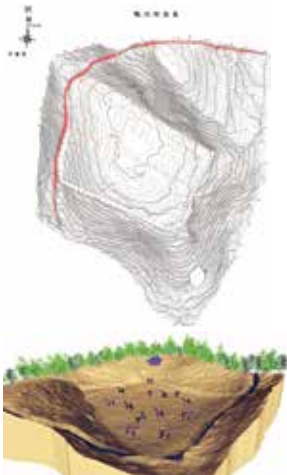
柱木の仮囲い 戦後も平坦地の縁に杭が残っていた



元名仮囲い 「馬捕り場」と呼ばれている鍋底状の四角い平坦地



元名仮囲い 平坦地がのびる谷部を全面石葺きの野馬土手で塞いでいる



元名仮囲いの測量図 (日暮 2012, 2013)

7. 四角い鍋底形をした馬の繁殖地

野馬土手の分布調査の時に、山をカットした崖と急斜面に三面が囲まれ、一方を野馬土手で塞いだ四角い鍋底のような平坦地が存在することに気付いた。この平坦地は、一辺が 30 m から 50 m ほどの単独の空間で、複数の柵がある馬捕り場と構造的に異なっている。

平坦地の一角に、馬が水を飲むのに事欠かない水量の池、石

積みをした水路、平井戸などがあり、この区画の中に囲い込んで馬を飼養することが可能である。住民達がこの平場を「馬捕り場」と呼んでいることから旧馬捕り場との説があるが、土手が文化文政期の矢穴石で築かれており、誤りである。「祖父が子供の頃仔馬に乗って遊んだと言っていた」という話しも伝わっていることから、ここは毎年行われた馬捕りの時に付近の馬を一旦ここに追い込み、馬捕り場に追い立てていく追い込み場であり、馬の繁殖期には品種管理を行うための場である仮囲いと考えられる。仮囲いは、現在なお調査途上だが、村毎に仮囲いを造り、馬の繁殖を管理していた姿が見えてきた。

8. 年に一度の祭り 馬捕り

嶺岡牧には、放牧しておいた馬を捕まえるための施設である馬捕り場が、補馬の記録が残っている所が3箇所、「房州峯岡山野絵図」ですでに元馬捕り場と印されている所が2箇所、計5箇所が残されている。嶺岡牧の馬捕りの様子を撮影した写真に柵内の馬とともに大勢の人が仕切り土手の上に見えるが、年に一度の馬捕りの日は、馬捕り場に大勢の見物客が集まり、屋台も出てお祭りのようだったと伝えられている。

嶺岡牧の馬捕り場の特徴として以下の点をあげることが出来る。1) 山の斜面を段切り壁と平坦面を造り出している。2) 馬捕り場が傾斜をもっている。3) 仕切り土手に区切られた柵が一行に並ぶ。4) 馬捕り場を構成している土手に石垣がみられる。また、牧内の馬捕り場が全て良好に遺存していることも特徴といえよう。



1905(明治38)年の馬捕りの様子 43頭の馬と多数の見物客が写っている



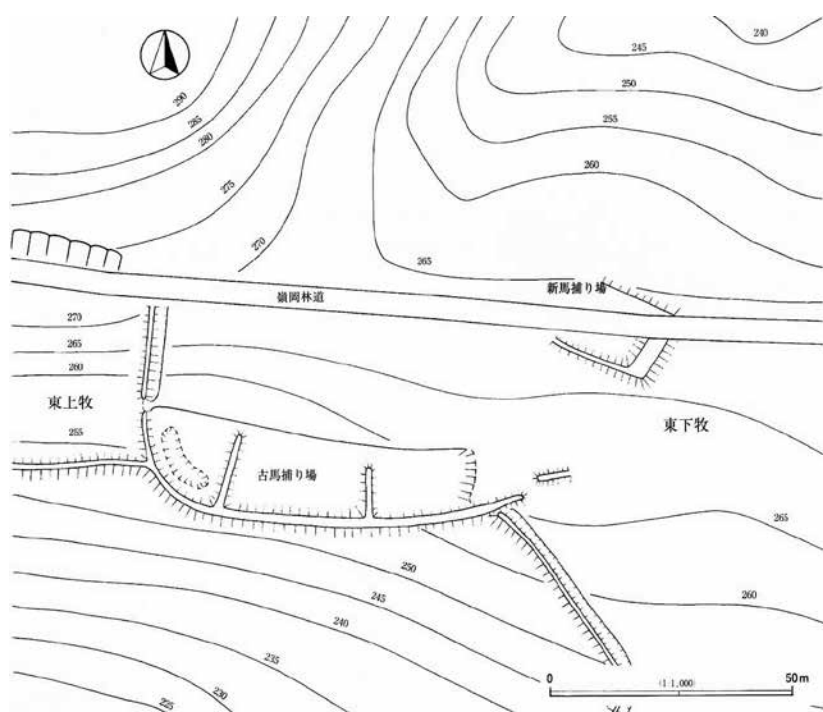
嶺岡東牧馬捕り場入口の仕切り土手 乱雑な野面積みの石垣を築いている



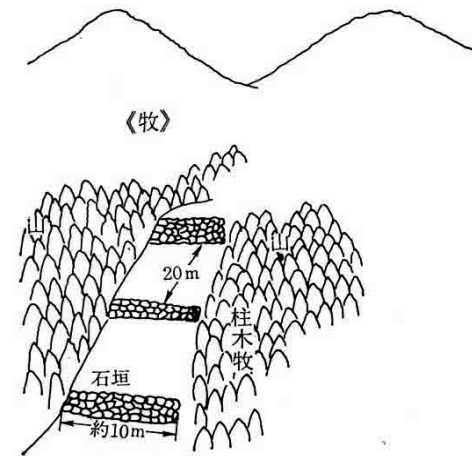
凹面状をなす嶺岡東牧馬捕り場の最も低く大きな柵から西の柵を望む



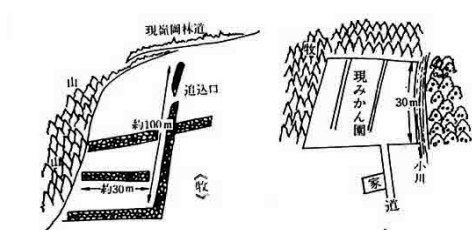
嶺岡東牧馬捕り場西柵外周の石垣 中央柵外縁と柵を仕切る土手は土盛



嶺岡東牧馬捕り場の概念図 根拠不明だが新馬捕り場と古馬捕り場に分けている (小高 2006)



柱木牧捕馬場跡



東牧捕馬場跡 西牧捕馬場跡(大田代)

馬捕り場の形状 (丸山町史編纂委員会 1989)

嶺岡西牧、嶺岡東牧の馬捕り場は牧の縁にあるが、柱木牧は牧の中に造られている。柱木牧の補馬は牧内を通して外に出す必要がある。



カットして馬捕り場の壁とした山の上から嶺岡西牧馬捕り場を望む



大山平塚の山中に残る元馬捕り場の柵 尾根部の勢子土手と繋がる



山田の山中に残された元馬捕り場の石垣

四方が尾根に囲まれた谷に形成された柱木牧の馬捕り場 写真奥に細い沢が入っている



柱木牧の馬捕り場 斜面に造られている馬捕り場の柵 石垣の上に土盛りをして築いた仕切り土手



牧士の会所として1735（享保20）年に設置された八丁陣屋の跡



今も水が満ちている八丁陣屋の井戸跡 水深は約2m

9. 牛馬を管理した拠点

嶺岡牧経営の管理は、嶺岡牧のほぼ中央部に造られた八丁陣屋で行っていた。番屋の他に牛舎、厩舎が建っており、馬を洗う池は戦時中も残っていたという。明治時代に八丁陣屋の建物は焼失してしまい、池は埋め立てられるなど旧状と大きく変わっているが、カットした山の縁に穿たれた井戸跡、陣屋裏の山に祀られた稲荷などに八丁陣屋の名残をみることができる。埋め立てや削平、桜を埋めるために穴を掘るなどで重機が何度も入っていることからかなり痛んでいるであろうが、発掘調査を行えばこれらの遺構が検出されるものと考えられる。

「房州峯岡山野絵図」では、八丁陣屋が尾根より北に描かれている。幕末の陣屋跡と道を挟んだ北の山林に当たるが、そこに石積みの遺構等があり注目される。



陣屋裏の尾根上に祀られた稲荷



牧士触れ頭も勤めた永井家 裏山が嶺岡牧



石井家の住宅と馬場跡（水田部）



里見氏牧の御馬屋別当の由緒をもつ石井家



牧士触れ頭の吉野五郎兵衛が建てた馬頭観音



牧士触れ頭であった吉野家の墓地

嶺岡牧を日常的に管理していたのは、幕府から任命された牧士であった。江戸幕府直轄牧になった時の嶺岡牧の牧士数は4人であったが、牧士制度改革があった1722（享保7）年にこれを解任し、改めて6名の牧士役を任命した。以後、牧士役は追加・退役があり、幕末は13名の牧士であった。

牧士の家は、病気の馬を家で飼ひ治療につとめたり、家の近くの馬場で調教を行うなど、事実上牧の一部としての機能を担ってきた。牧士住宅の多くは建て替えられているが、板東の石井家、北風原の永井家が旧状を残しているほか、馬場跡や墓地が現在まで残されている。嶺岡牧関連の史跡が良好に残っており、これを廻ることで立体的に嶺岡牧を捉えることができる。



馬場跡との伝承がある曾呂神社前の道



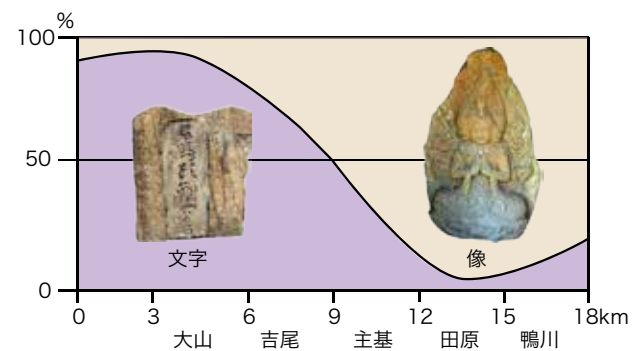
集落の入口に佇む馬頭観音 向かって右端の文字塔の馬頭観音は銘に関東大震災で死んだ牛の供養のためにたてたことが記されている



頭上に馬頭がのる馬頭観音像と牛頭観音

10. 牛馬に感謝し暮らしの安寧を祈って

鴨川市には馬頭観音と牛頭観音を合わせて305体が確認され、嶺岡牧周辺地域は諸石仏のうち馬頭観音が最も多いことが分かった。馬頭観音は、厄の破砕と日常生活に不可欠だった牛馬の供養に祀ったものだが、牧があり牛馬と密接だったことから、嶺岡牧周辺地域に多くの馬頭観音がたてられた。嶺岡牧周辺の馬頭観音は、嶺岡牧の南に牛頭観音圈があるなど、地域・時代差が存在し、馬頭観音から文化圏が捉えられる。



嶺岡牧の西端を始点とした東西距離と馬頭観音の像と文字の構成比



嶺岡牧社解散後に再びつくられた地域酪農会社である嶺岡畜産株式会社



八丁陣屋から大井に移った後の嶺岡畜産株式会社の畜牛舎



嶺岡種畜場の牛乳処理を行っていた真田練乳牛酪製造所



森永製菓前史の工場（森永乳業50年史編集委員会1967）



森永製菓創業の地である真田練乳牛酪製造所が川の畔にあった 背後の山が嶺岡牧

11. 地域酪農会社と黎明期の乳製品製造業

日本酪農発祥の地である嶺岡牧の周辺地域は、畜産の先駆技術を活かして、江戸幕府直轄牧が廃止された明治維新後間もなく、牧に関連した村の有力農民を中心として、現在の集落営農よりさらに先進的な広域地域で酪農を行う会社を立ち上げた先駆地域である。また嶺岡牧周辺地域は、安房酪農地域で搾乳された乳を用いた製乳工業が早くから興り、主要乳牛メーカーの創業地ともなった所でもある。

おわりに

嶺岡牧の基礎調査に着手して足かけ4年。この間に得られたデータのうち、遺跡の詳細地表面調査法で確認された遺構を中心に整理したのが本冊子である。野馬土手、馬の水飲み場など各遺構で一冊の著書になる。また、2013年度に南房総市域の野付き村を対象地域として調査を始めた馬頭観音は、鴨川市域で確認されているだけで305体、南房総市域を合わせると400体に達することが見込まれ、相当厚い著書でないと全貌を示すことは難しい。これらのことは、嶺岡牧は膨大な歴史遺産が詰まっている史跡であることを示している。今回は、馬具や牧があったことと関連する民具、祭りなど無形文化財に分類される民俗資料、1万点をこえる古文書については触れなかった。なぜならば、これらも資料が多く、1冊の冊子にまとめるのではなく、分けて扱った方が良くないと判断したからである。

本冊子の内容を、現地に立って確かめ、嶺岡牧再生、そして嶺岡地域再生の方法を考え、その実現に向かう潮流がつくり出されていくことを願う次第である。



嶺岡牧の面影を残す千葉県酪農のさと

【文献】

青木更吉（2005）嶺岡牧を歩く，崙書房，p.72.

日暮晃一（2012）嶺岡牧―嶺岡牧再生にかかわる基礎調査報告書―，エコロジー・アーキスケープ編，鴨川市・エコロジー・アーキスケープ，p.10.

日暮晃一（2013）馬の足音を感じて，エコロジー・アーキスケープ編，嶺岡牧散歩3，鴨川市企画政策課．

金木精一編（1961）安房酪農百年史，安房郡畜産農業協同組合．

丸山町史編纂委員会（1989）丸山町史，丸山町，p.285.

森永乳業 50 年史編纂委員会（1967）森永乳業 50 年史，森永乳業，p.26.

小久貫隆史（2006）県内牧跡分布，県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧跡，千葉県教育振興財団，p.10.

小高春雄（2006）嶺岡牧，県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧跡，千葉県教育振興財団，p.96.

写真：白黒の写真は，金木編（1961）執筆のために撮影・収集された写真（酪農のさと所収資料）。

表紙写真：嶺岡東下牧南縁（仲町）の野馬土手

裏表紙写真：嶺岡乳牛研究所の玄関前にたつ「日本酪農発祥之地」を記念する石碑



海に近い嶺岡牧周辺の酪農家は海に牛を連れて行った